

大阪市立電気科学館星の友の会「月刊うちゅう」(1989年8月号)より

■高木公三郎 「大阪のプラネタリウムと私」(1989)

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ ◆◆◆◆◆ ◆◆◆◆◆ PLANETARIUM

大阪のプラネタリウムと私

高木 公三郎

プラネタリウムが50年余り、沢山の方々の御努力で、立派にやって来て載いたことを感謝いたします。終戦後、四ツ橋に出かけて、あれがともかく助かったのを見て、ほっとしたことがありました。

ミノルタが日本製を作る時、私のところにあった昔のプラネタリウムに関するものをほとんど差上げてしまいましたので、今は何もありませんが、思いつくままに記してみることいたします。

ツァイスのプラネタリウムを最初に注文して、第1号を作らせたのは、ミュンヘンのドイツェ・ミュージアム(有名な自然科学博物館)の館長であったオスカー・フォン・ミラー(Oskar von Miller)で、ハイデルベルグ天文台長のウオルフ(Wolf)教授と相談し、ドームの内側に星空を投影し、ドームの中にいる人々に見せることを考えて、その機械をツァイスのバウエルスフェルド(Bauersfeld)博士に工夫させたのです。ミラーは、1934年に逝去し、私がツァイスやミュンヘンに行った1936年には既に故人となっておられて、お会い出来ませんでした。惑星の動きを正しく示すための軌道や周期を表わす歯車の計算などに努力されたとのことでした。

私はシバリア・ラインで行きましたので、はじめにモスクワの、当時としては新しいプラネタリウムを訪れ、施設や取扱い上のいろんなことを、はじめて勉強しました。特に北天、南天を見るための椅子の工夫、その配置は、なかなかよいと思いましたが、大阪へ報告しておいたのに、大阪の椅子は全く駄目でした。つまりあんな事情であんな椅子になったのですが、その後の日本のものはいずれも駄目です。

それはともかく、ツァイスの工場ではやっと思いが完成し、大阪のプラネタリウムを組み立てることになっていた時に、私がイェナに着き、ラング氏が中心で私も参加してその組み立てをしたわけです。星々の関係を整えるために、投影しながら微かなところをやったものです。

大阪のを1937年に組むのは、ツァイス日本在住のヘンズゲン氏とミュンヘンから来たラング氏と電気局の岡本さんと、私も京都から掛日通つて立合いました。

ツァイスの第1号、ミュンヘンのものは、北天だけの投影器でしたが、その後は南天全天のものになりました。大阪の施設は、世界第2番目、東洋では最初ということでした。

ベルリン、ニューヨーク、ロサンゼルスなどで夫々一日、二日とべつたり付いて施設や扱い方を見せてもらい、偉そう



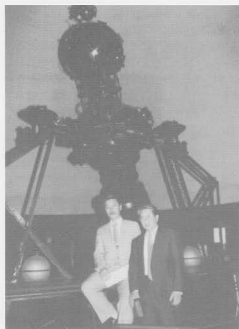
プラネタリウムの到着を報じる当時の新聞 左上の写真が高木先生(東京日日新聞)

K. TAKAGI

に若干のアドバイスをしだりして帰って来ました。私の知った限りのことを大阪で実際にやりながらお伝えしたつもりでしたが、100%うまくやって下さっていたかどうか判りません。うまく扱うには、機械と皆さんに対するほんとうの親切心が必要だと、その頃しみじみ思ったものです。

思い出付こと、いろいろありますが、今回はこれで失礼します。プラネタリウムは教育施設で、それで輸入したときも税金を支払っていないのです。今後も出来れば正しい教育のために使ってほしいものです。その様に使えるところへおいてほしいものですね。

(たかぎ・こうぞぶろう)



上：プラネタリウム最後の日に

右：先生に書いていただいた色紙

天体力学から
人体力学に転じました
高木公三郎
平成元年五月三十一日

高木公三郎先生とプラネタリウム

高木先生は、京都大学理学部宇宙物理学科をご卒業になり、山本一清博士のもとで助手として天体力学の研究をなさっていました。プラネタリウムの導入にあたっては当初から山本博士が指導されていましたが、高木先生はベルリンオリンピックのボートのマネージャーとしてドイツに行かれる際、大阪市より委嘱されてプラネタリウムの現地検収などにあたられました。電気科学館の開館前後は、プラネタリウムの組み立て、使用法、説明法等、種々指導をお願いしました。戦後は京都大学の教授となられ、医学博士。カヌーを日本へ初めて紹介なさったことでも有名です。